

オホヤケとワタクシ

——ヤケ・ミヤケ・オホヤケの再検討／「ワタクシ 私」の形成——

田 中 みどり

はじめに

一、ヤケ・ミヤケ・オホヤケの再検討

一・一 ミヤケの再検討

一・一 a 風土記のミヤケ

一・一 b 古事記・日本書紀のミヤケ

一・二 ヤケの再検討

一・二 a ヤケダ・ヤケ——御料地

一・二 b ヤ・ヤケ・ヤケヒト・ヤカベ・ヤタコ

一・三 オホヤケの語構成

一・四 ヤケ・ミヤケ・オホヤケの語義

二、「ワタクシ 私」の形成

二・一 ワタクシの語構成

二・二 ワ・タ

二・三 ワタ

二・四 クシイナダヒメとクシダガワ

二・五 ワタクシ

二・六 ワタクシの形成

一、ヤケ・ミヤケ・オホヤケ
風土記にヤケ「益氣」「宅」「播磨國風土記印南郡」、オホヤケ「大
家」「大宅」「播磨國風土記眞保郡」の例がある。風土記にはまた、ヤ
ケダ「宅田」「豊後國風土記國崎郡」の例もあることを考え合わせれ
ば、「御料地」をヤケと呼ぶ場合のあることを確認することができ
る。「宅田」は「朝廷御料の田」であり、「益氣里」「宅村」は「御宅」朝
廷御料地を造つたゆえの命名なのである。

ヤケは、所領地・御料地を指す語であり、そこに奉仕する共同体
(氏族)を含むものである場合もある語である。風土記のヤケに建造
物の義のものではなく、武烈前紀「物多に於哀野該過ぎ」の枕詞「物多
にモノサハニ」も「オホ」に係るものである(従来言われているよ
うに、「オホヤケ」に係るものではない)。「オホ」は尊称である。
また、ミヤケも、御料地を指す語であり、「オホヤケ」の「オホ」
は、「ミヤケ」の「ミ」よりもさらに敬意を含む。

二、「ワタクシ 私」の形成

ワタクシの語構成として考え得るものは、ワ・タ・クシないしワタ・
クシである。

「クシ」は「申」がその原義で、「専有地・占有地」の標(しるし)
を立てた田を、「クシダ」「クシイナダ」と呼んだのではなかったか。
そうして、ワタクシの語構成としては、「ワ・タ・クシ我田申」
「ワタ・クシ 曲申」のふたつを考えることができるが、「私曲」「ワタ
クシ」(仁徳天皇即位前紀)という訓があることから、「ワタ・クシ
曲申」であると考える。この場合、「曲」は「ワダ」と「ダ」が濁音
であるが、濁音が清音に変化する例は、「ワタ」や「カツラ」に求め
ることができる。(陽「ワタ」は「曲」「ワダ」がもとになつてできた
語であると考えられている。また、「カツラ」が「カツラ」に変化す
る例もある)。

「ワタクシ」は「曲申」すなわち「私の占有地」であるう。これが
一語化して、「ワタクシ 私」となった。

はじめに

萬葉集卷第七・1275 雜歌、旋頭歌

住吉 小田苅為子 賤鴨無 奴雖在 妹御為 私田苅

(『萬葉集 本文篇』埴書房 一九六三年。以下同。傍点、引用者、以下同。)

は、柿本朝臣人麻呂歌集の歌であるので、白鳳期の歌であると考えられる。^①

この歌の中の「私田」は、「ワタクシダ」と訓むのが一般である。上代文献には、一音一字表記の「ワタクシ」が見あたらないため、「私田」は、「ワタクシダ」のほかに、「キサキダ」「カクシダ」と訓む説もある。^②

農業経営をおもな経済基盤とする律令国家の、まず第一の事業は、田地の所有を明確にすることであった。それは、統一国家における、朝廷と豪族との力関係を位置づけることにほかならない。「公田」——「私田」の対立は、律令国家形成の際に中国より導入された概念であろう。そもそも、「私」という文字自体が、「かこつて自分のものとしたいね」の意をもつ、農耕に深い関係のある文字である。^③

この「公田」「私田」は、もともと音で読まれたものであろうが、右に挙げた萬葉集卷第七・1275の歌の歌われた時には、それに該当する和訓が成立していたことはた

しかである。①「小田」を「ヲダ」と訓むこと、②「苅」に助動詞などを表わす字は付いておらず、これは二音で「カル」であろうから、「私田」は五音の訓であると考えられること、などから、そのように考える。

この「私田」を「ワタクシダ」と訓むのは、平安時代において、和文に「オホヤケ 公」「ワタクシ 私」という語が用いられ、『日本書紀』など奈良時代に成立した文章の中の「官」や「国家」を「オホヤケ」・「屯倉」や「官家」を「ミヤケ」と訓み、「私田」が「公田」に対するものであることに拠る。

今、もし、この「私田」を「キサキダ」「カクシダ」と訓むならば、それに対する「公田」は「※オホキミダ」「※アラハシダ」と訓むことになるであろう。「公田」をそのように訓んだ例はなく、したがって、「私」を「キサキ」「カクシ」と訓むことは可能であつても、「私田」の場合の「私」に「キサキ」「カクシ」をあてはめるのは無理がある。^④

よつて、萬葉集卷第七・1275の歌の歌われた白鳳期の時点ですでに、「オホヤケ 公」——「ワタクシ 私」という語が存在し、対立する概念でとらえられていた、と考える。

一、ヤケ・ミヤケ・オホヤケの再検討

一・一 ミヤケの再検討

住吉の 小田を刈らす子 奴かもなき 奴あれど 妹
がみためと 私田刈る

(萬葉七・1275)

萬葉卷第七・1275の歌は、このように訓める。「賤」

「奴」は、

越中守大伴宿祢家持の報ふる歌并せて所心三首
天離る 鄙の夜都故に 天人し かく恋すらば 生け
る 驗あり

(萬葉十八・4082)

別に奉る 云云 二首

縦さにも かにも横さも 夜都故とそ われはありけ
る 主の殿戸に

(萬葉十八・4132)

に「夜都故」があり、「ヤツコ」と訓まれている。

ヤツコは「家の子」であり、奴婢を指した(律令制の奴婢には、公奴婢と私奴婢とがある)。次に、ヤツコは「君臣、従者」の意で用いられることもある。それが、他者を蔑んだり自分を貶めたりする時にも用いられたことから、ヤツコ・ヤツコラマ(臣、奴僕)という一人称代名詞に転じていく語

である。

律令制以前の氏姓制度を支える基盤である部民制において、奴婢(ヤツコ)は最下層の者で、それよりは上の層に、「家人 ケニン・ヤケヒト」があり、「家部・家人部 ヤカベ・ヤケヒトベ」(ヤカはヤケの交蕃形という集団をなして、大氏族に属していた。ヤケヒト・ヤカベは豪族ないし朝廷の御料地の田に奉仕する人々を言い、ヤツコは奴婢を言う。このヤケという語は、「豪族ないし朝廷の御料田を耕する共同体」を指すことにもなる。奈良時代に、中臣宅守(ナカトミノヤカモリ)・大伴家持(オホトモノヤカモチ)などという名の人物がいるが、この「宅守」「家持」という名は、「宅・家」を所有する豪族の長として生まれた故の命名であつたであろう。

ここでは、ヤ、ヤケは共同体を指す語である。しかるに風土記には、「開墾居住すべき地」「屯倉」などの意のヤ、ヤケもあらわされている。

風土記には、野を墾き田の作られていく様が記されている。

1、稱多志野者 品太天皇 巡行之時 以鞭指此野

勅云 彼野者 宣造宅及墾田 故號佐志野

今改號多志野

〔播磨國風土記饒磨郡 岩波日本古典文學大系『風土記』一九五八年。以下同。二八〇頁。傍点、引用者、以下同。〕

をはじめ、

2、難波高津宮天皇之世 召筑紫田部 令墾此地之時…

3、小治田河原天皇之世 遣大倭千代勝部等 令墾田…

〔播磨國風土記揖保郡 二九四頁〕
4、宇治天皇之世 宇治連等遠祖…墾田將蒔種來時…

〔播磨國風土記揖保郡 二九六頁〕
5、難波長柄豊前天皇之世…天皇勅曰 宣墾此野作田 乃遣阿曇連太牟 召石海人夫令墾之…

〔播磨國風土記揖保郡 二九八頁〕

など、開墾の進む様子が、その時期とともに記されている。

さて、1の「彼野者 宣造宅及墾田」の中の「宅」を、大系本は「ヤ」と訓み、その頭注に、

○御宅（屯倉）の意でなく民家の意とすべきであろう。

開墾居住すべき地の意。

と述べる。新編日本古典文学全集『風土記』（一九九七年）はやと訓み（四三頁）、その頭注に、

○益気の里ではヤケと訓んだが、一般民家の意だからヤと訓む。

と述べる。いずれも、この場合の「宅」は民家であるところえ、またヤケは「屯倉 ミヤケ」であるところえっているものである。

ヤとヤケとはどのように違うのであろうか、ヤケとミヤケとはどのように異なるのであろうか、さらにオホヤケとはどのような関連があるのであろうか。風土記・古事記・日本書紀・萬葉集などの用法を再検討し、ヤケ・ミヤケ・オホヤケの原の意を解明する。

ミヤケは、時代別国語大辞典（三省堂 一九六七年）に、

みやけ【屯倉・官家】（名）①朝廷の領地の御田ミタからとれる穀類を貯蔵する御倉。また、その耕地・農民をもさす。ミは接頭語、ヤケは宅・家。②朝鮮半島諸国の官府・屯倉ミヤケ。ウチツミヤケ（内官家）とも。③朝廷【考】②は対鮮関係のミヤケで、日本書紀では、一般に「官家」と書いて、国内の「屯倉」と書き分けている。

とあり、日本国語大辞典（初版）には、

みやけ【屯倉・屯家・官家・三宅】（「み」は接頭語。

「やけ」は「やか（家・宅）」の変化した語 ①律

令制以前、天皇の直轄地である御田（みた）におかれ、收穫した穀物を納めた倉および官倉。また、朝廷直轄領をもいう。②（官家）（①になぞらえ、日本に対する貢納国の意で）大和朝廷が四世紀末頃から六世紀後半まで南朝鮮に領有した直轄地。うちつみやけ。③大化以後、正税として稻などを收納する公の倉庫、およびそれを管理する役所。④朝廷をいう。

とある。よく似た記述ではあるが、時代別国語大辞典①にある「農民」に該当する例は、風土記・古事記・日本書紀の中には見当たらない。

一・一—a 風土記のミヤケ
風土記には、

- (1) 御料地
 - (2) 官倉
 - (3) 里の役所、里長の公邸
 - (4) 大化改新以後の公倉
- などのミヤケがある。

(1) 御料地

6、越部里 舊名皇子代里 土中々 所以號皇子代者

勾宮天皇之世 寵人 但馬君小津 蒙寵賜姓
爲皇子代君而 造三宅、於此村 令仕奉之 故曰
皇子代村 後至上野大夫結卅戸之時 改號越部
里

上野大夫が卅戸を結ぶまでは民家もなく、御料を供する耕地のみであった、と読みとることができる。

7、造屯倉之處 卽號御宅村 造倉之處 號御倉尾

〔播磨國風土記美養郡 三五二頁〕

この場合「屯倉」は、その倉を包有するところの、「御料田の地」である。

(2) 官倉

8、卽彼田稻 收納之御宅、卽號鰯磨御宅 又云賀和良久三宅

〔播磨國風土記揖保郡 二八二頁〕

の「御宅」は官倉である。

(3) 里の役所

9、於是 犬猪 以爲異劔 獻之朝廷 後 淨御原
朝廷 甲申年七月 遺曾禰連磨 返送本處 于
今安置此里御宅

〔播磨國風土記讃容郡 三二四頁〕

この「御宅は、「郡家」を「コホリノミヤケ」と訓む場合

の「ミヤケ」(岩波日本古典文学大系『風土記』五〇頁など)と同じである。

(4)大化改新以後の公倉

出雲国風土記には、意宇郡山國郷・舍人郷・山代郷の条、仁多郡三澤郷・横田郷の条に

10、即有正倉、

「正倉」がある。これは、大化改新以後のものである。

一・一—b 古事記・日本書紀のミヤケ
次に、古事記・日本書紀のミヤケを検討する。

古事記には、仁德天皇の条に、

11、此天皇之御世、爲太后石之日賣命之御名代、定葛城部、亦爲太子伊邪本和氣命之御名代、定壬生部、亦爲水齒別命之御名代、定蜷部、亦爲大日下王之御名代、定大日下部、爲若日下部王之御名代、定若日下部。又役秦人作茨田堤及茨田三宅、又作丸邇池、依網池、又掘難波之堀江而通海、又掘小椅江、又定墨江之津。

〔古事記下巻 岩波日本古典文学大系『古事記 祝詞』一九五八年。以下同。二六四—二六六頁。傍点 引用者、以下同。〕

の「三宅」がある。これは、朝廷の水田開発事業である。

次に、景行天皇の条に、

12、此之御世、定田部、又定東之淡水門、又定膳之大伴部、又定倭屯家。

「屯家」がある。これは、倭朝廷の直轄領を定めたものである。
〔古事記中巻 二〇六頁〕

日本書紀には、垂仁紀二十七年の条に、「屯倉 彌夜氣ミヤケ」の例

13、是歲、興屯倉于來目邑。屯倉、此云彌夜氣。
〔垂仁紀 岩波日本古典文学大系『日本書紀 上』一九六七年。以下同。二七三頁。傍点 引用者、以下同。〕

があり、「屯倉」を「ミヤケ」と訓んでいる。

日本書紀では、古事記の11に該当する箇所は、

14、十三年秋九月、始立茨田屯倉。因定春米部。

と記されており、12に該当する箇所は、日本書紀では、
〔仁德紀『日本書紀 上』三九五頁〕

15、冬十月、令諸国興田部屯倉。

〔景行紀『日本書紀 上』三二七頁〕
と記されていて、いずれも「屯倉」である。日本書紀には「屯倉」の例が多数あり、「朝廷直轄領」をあらわす。

以上のように、古事記の「三宅」「屯家」・日本書紀の「屯倉」は、

(1) 朝廷直轄領

である（その中に農民を含む場合もあるが、時代別国語大辞典の記述のように、ミヤケが「農民」そのものをさすのではない）。また「ミヤケ」は、「官家」と表記して、

(2) 官家・官府。朝鮮半島経営の拠点

を指すものともなる。

なお、『時代別国語大辞典 上代編』「みやけ」の項には、

(3) 朝廷

として、「官船名枯野者、伊豆国所貢之船也」（応神紀三一年）の用例を掲げている。ただし、この例は、次に「是朽

之不堪用。然久爲官用、功不可忘。」と続くもので、岩波

日本古典文学大系『日本書紀 上』（三七六頁）では、「官

船」は「みやけのふね」、「官用」は「おほやけもの」と訓

んでいる。岩波日本古典文学大系『日本書紀』の訓読の方

針は、「各巻の最古の写本によつて訓読を行うが、訓読の

形式的な面は、その中の最も古い巻、岩崎本の推古紀・皇

極紀の訓読に合わせて統一する」（解説 大野晋、同五〇頁）と

いうものである。古写本を詳細に検討した結果、このよう

に訓まれたものではあるが、「官用」の場合に「官」を

「おほやけ」と訓むのであれば、「官船」の「官」を「み

やけ」と訓んでよいのかどうか、疑問の残るところである。

風土記にも「官船」の例（播磨國風土記 讃容郡の条、岩波日本古

典文学大系『風土記 三四頁）があつて、岩波日本古典文学大系本では、「みやけのふね」と訓んでいる。が、これも定かではない。

以上、風土記・古事記・日本書紀の中のミヤケについて、まとめた。これらは、風土記・古事記・日本書紀編纂当時のミヤケの実態である。

一・二 ヤケの再検討

ミヤケの核にはヤケがあるが、このヤケとは何であつたのであろうか。次に、ヤケについて考える。

一・二―a ヤケダ・ヤケ——御料地

風土記の中で「ヤケ」と訓み得る例に、

- 16、益氣里 所以號宅者 大帶日子命 造御宅於此
村 故曰宅村

〔播磨國風土記印南郡 二六六頁〕

「益氣」「宅」がある。また、

- 17、大家里 舊名大宮里 土中上 品太天皇 巡行之時
營宮此村 故曰大宮 後 至田中大夫爲宰之
時 改大宅里

〔播磨國風土記揖保郡 二九六頁〕

の「大家」「大宅」は「オホヤケ」と訓み得る。さらに、

18、此峯下 有水田 本名宅田

〔豊後國風土記國崎郡 三七二頁〕

の「宅田」は「ヤケダ」と訓んでよいであろう。

16は「御宅」を造って「ヤケ」と名付けたというのであるから、この場合、ヤケはミヤケに等しいものと解される。17の「オホヤケ」は、旧の名の「大宮」の「大 オホ」と同じ敬称の「オホ」を、その「ヤケ」に付したものと考えてよい。18の「ヤケダ」は「ヤケの田」、すなわち「ミヤケの田」で、「御料地の田」の意である。いずれのヤケも「御料地」ということになる。

右の

18、此峯下 有水田 本名宅田、

〔豊後國風土記國崎郡 三七二頁〕

の「宅田 ヤケダ」を、岩波日本古典文学大系『風土記』頭注は、

○ミヤケ（屯倉）の田、朝廷御料の田の意か。

とする。新編日本古典文学全集『風土記』の頭注（三〇三頁）は、

○ヤケダは、屯倉（ミヤケ）の田の意か。と注する。

16、益氣里 所以號宅者 大帶日子命 造御宅於此

村 故曰宅村

〔播磨國風土記印南郡 二六六頁〕

については、岩波日本古典文学大系『風土記』には、「宅」の頭注に、

○ミヤケ（屯倉）をヤケという例はない。地名説明のための説話の上だけのことである。

と注している。新編日本古典文学全集『風土記』の頭注（二七頁）も、趣きは同じで、

○ミは敬称。ヤケは家屋だけでなく、その周辺の居住地を含む。揖保の郡大家の里は大宅の里とも書く。

天平元年（七二九）八月宣命に「己が夜氣やけ授くる人をば」の仮名書き例。こは、屯倉ではあるまい。

と注する。

18も16も古い時代のことからで、18を「屯倉」と考えるのであるならば、16も「屯倉」と考えてよいが、時代の書かれている16の大帶日子命（景行天皇）の御世に「屯倉」といえるものはまだ形をなしていないであろうというならば、岩波日本古典文学大系『風土記』の18の頭注の、

○ミヤケ（屯倉）の田、朝廷御料の田の意か。

にある「朝廷御料の田」を考え合わせればよいであろう。このような例のあることを考え合わせれば、「御料地」を

ヤケと呼ぶ場合のあることを確認することができる。18の「宅田」は「朝廷御料の田」であり、16の「益氣里」「宅村」は「御宅」朝廷御料地」を造つたゆえの命名なのである。

大帶日子命（景行天皇）の妹の倭姫命は各地を經巡つた後に、伊勢の地に宮を造営する。これは、現在の伊勢神宮（正式名称は、単に「神宮」であるが、通例にならつて、「伊勢神宮」とする。）であるが、その「御田 ミタ」を「家田 ヤタ」と言う。ヤケダは、これと同じものである。

16のミヤケは、尊称「御 ミ」をつけることで、朝廷御料地であることを明確に示したものである。これは、

19、三處郷 卽屬郡家 大穴持命詔 此地田好 故吾御地占詔 故云三處

〔出雲國風土記仁多郡 二二六頁〕

のミの用法と同じである。「御宅」を造つて「益氣里宅」と名づけることはあり得るものであった。この記述に従つて読むならば、この場合のミヤケは「御料地」であり、ヤケは、その核になる部分よりする命名ということになる。

一・二一b ヤ・ヤケ・ヤケヒト・ヤカベ・ヤタコ
今ひとつ、一・一に掲げた

1、稱多志野者 品太天皇 巡行之時 以鞭指此野

勅云 彼野者 宣造宅及墾田 故號佐志野
今改號多志野

〔播磨國風土記飭磨郡 二八〇頁〕
の「宅」を「ヤ」と訓むか「ヤケ」と訓むかという問題がある。

岩波日本古典文學大系『日本書紀 下』補注18. 一三（五五〇頁）の「屯倉・官家」の説明の中に、

○ミヤケの語義は御宅、すなわち屋舎・倉庫に対する敬称であるから、：

という箇所がある。「宅 ヤケ」がほんらい建造物を指すものであるのかどうか、ここで問題になる。建造物を指す語には「屋 ヤ」もあり、これらの語が風土記や日本書紀の中でどのような意義で用いられているか、検討する必要がある。

出雲國風土記神門郡の条に、

20、八野郷 郡家正北三里二百一十歩 須佐能袁命

御子 八野若日女命坐之 爾時 所造天下大神

大穴持命 將娶給爲而 令造屋給 故云八野

〔出雲國風土記神門郡 二二三頁〕

とある。この場合「屋」は「居住する家」の義であり、「屋」を造つたことから「八野」と称するようになったと

いのであるから、「屋」の訓は「ヤ」であることが明らかである。

次に、時代別国語大辞典上代編（三省堂 一九六七年）のヤの項とヤケの項との記述を掲げる。【考】の部分が必要であり、語釈の部分と関わるので、煩雑ではあるが全文を掲げる。

や【屋・舎】（名）家。「百千足る夜庭も見ゆ」（記応神）「難波人葦火焚く屋のすしてあれど」（万二六五）「夕づく日さすや河辺に構る屋の形をよろしむ」（万三三二〇）「置於住室之翼階へ屋乃乃幾」（靈異記下一〇話）「其宮也、城闕崇華、楼台壯麗」（神代紀下）「四阿阿豆万屋・倆下万屋」（新撰字鏡）「屋遊也乃字倍乃古介」（本草和名）【考】多く具体的な建造物としての家をさし、第三例以下などはその主要部分である屋根の意ともみられる。第一例のヤニハやヤド・ヤヌチなどは、もう少し広義で、屋敷・居住する所としての一廓をいうようである。

やけ【宅】（名）家屋敷。居住地。「是歳、興屯倉ミヤけ（弥夜氣ミヤけ）于来目邑」（垂仁紀二七年）「とひとまにも己が夜氣やけ授くる人をば一日二日と扱び」（七語）「益氣里ヤケノサト、所以号宅ヤケ者、大帶日子命、造御宅ミヤけヲ於此村、故曰宅ヤケ村」（播磨

風土記印南郡）「豊前国娘子大宅女オホヤケメ歌」（万七〇九題詞）【考】オホヤケ・ミヤケなどの複合語から考えても、ヤケにあてられることの多い「宅」の字からいっても、ヤケは建物としての家屋のみをいうのではなく、生活地としての屋敷地・居住地の一廓の意かと思われる。その含む範囲がどれほどであるかは、日常生活の単位がどのような構成をもつかによるが、家人ヤケヒト・家部ヤカベの語の存在が示唆的であるといえよう。なお、ヤカベ（↓次項）や人名大伴家持ノヤカモチ・中臣宅守ヤカモリなどのヤカ（↓やかす）は、ヤケの交替形であろう。なお応神紀二年の条の「宅媛也吉比女」（日本紀私記丙本）のヤコも同類の語か。ただし人名なので宅ヤコという形の実際の使われ方は不明である。

以上のように、時代別国語大辞典ではヤよりヤケの方をより広い範囲のものととらえている。これらのヤ・ヤケのとらえかたは空間的なものであるが、ヤケの【考】に、ヤケヒト・ヤカベなどを掲げているように、ヤケには、さらに抽象的な「集団」「共同体」にもかかわる概念を含んでいるように考えられる。

ところで、右にも触れたが、現在の伊勢神宮の「御田

ミタ」を「家田 ヤタ」と言う。この家田の場合のヤにも、「神宮所領の」の義があつて、この場合のヤは、右のヤケと同じく、抽象的な義のものである。この家田がいつの時代に生じた名称であるのか詳らかではないが、萬葉集には「ヤタコ」と訓める語が一例ある。

萬葉集卷第二・193 挽歌、皇子尊宮舍人等慟傷作歌
廿三首

21、八多、籠良我 夜晝登不云 行路乎 吾者皆悉
宮道叙為

〔萬葉二・193〕

の「八多籠」について、古来、「ハタコラ」「ヤタコラ」の訓がある。塙書房『萬葉集』・新潮日本古典集成『萬葉集』・岩波日本古典文學大系『萬葉集』や澤瀉久孝『萬葉集注釈』などは「ハタコラ(畑子ラ)」としており、平凡社『萬葉集大成』では「ヤタコラ」とする。この「八多」は「家田 ヤタ」であつて、「八多籠」は「ヤタコ」と訓んで、「家田子」すなわち、所領地の農作にかかわる者の謂である、と考える。

風土記ではおおむね、「家 ヤ」は建造物を「宅 ヤケ」は御料地を指す。が、「家田子 ヤタコ」のヤにもすでに「所領の」の義があつた。したがって1の「宅」は「ヤ」と訓んでも「ヤケ」と訓んでもよく、その義は「御料地」

である。

そして、ヤケは、朝廷の御料地だけではなく、豪族の所領地およびそこに従事する人々をも包括する義で用いられるものでもあつたことが、大伴家持(オホトモノヤカモチ)・中臣宅守(ナカトミノヤカモリ)などの人名にあらわれている。「家持」「宅守」という名は、「宅・家」を預かる豪族の長として生まれた故の命名であつたであろう。

以上のことより、ヤケが「所領地」「御料地」を指したものであつたことがわかつた。ミヤケは「朝廷御料地」であることを明確にするために尊称の「ミ」が付されたものであつた。中央の官は租税を徴収するに際して、たとえば「多志野のミヤケ」からの租税を、その穀倉に管理されたもので概念化した。この時、「多志野のミヤケの官倉」は「多志野のミヤケ」と同一視される。そこでミヤケに「官倉」の義が生じた。里の管理者にとつて、この穀倉は「里の役所」でもあつた。こうしてミヤケは「官倉」や「里の役所」の義をもつようになったのであつた。

それでは、オホヤケは、どのような義をもつ語であつたのであろうか。次に、オホヤケの語構成を考える。

一・三 オホヤケの語構成

一・二―aのヤケの記述の中で、

17、大家里舊名大宮里 土中上 品太天皇 巡行之時

營宮此村 故曰大宮 後 至田中大夫爲宰之

時 改大宅里

〔播磨國風土記攝保郡 二九六頁〕

にふれた。次に、このオホヤケの語構成について述べる。

時代別国語大辞典「おほやけ」の項は、第一義に、

宮殿などの大きな建築物（↓やけ）。この意味のオホ

ヤケは地名にだけ残っている。

として、

「物多サハに於哀野おほやけ談過ぎ」（武烈前記）

の例を掲げ、【考】に、

①が原義で、これに相当する官庁や官の倉庫には設備・物品が多いところから、①の第一例にみえる枕詞をうけることにもなる（↓ものさはに）。

と述べる。また、日本国語大辞典「おおやけ」の項に、

《方言》②大家族の家。滋賀県

と、現代の方言の「大家族の家」の記述があり、「やけ」

の項に、

《方言》「大やけ」「小やけ」家族の人数 滋賀県愛

知郡

と、現代の方言の「大やけ」「小やけ」の記述のあることに注意しておきたい。

さて、時代別国語大辞典の第一例の歌は、

22、石の上 布留を過ぎて 薦枕 高橋を過ぎ 物

多に 大宅過ぎ 春日 春日を過ぎ 妻隠る

小佐保を過ぎ 玉筥には 飯さへ盛り 玉盃に

水さへ盛り 泣き沾ち行くも 影媛あはれ

〔武烈天皇即位前記『日本書紀』下 十二頁〕

と訓むことのできる歌である。「物多に」の前にある枕詞

「薦枕」は地名「高橋」の「高 タカ」に係っている。こ

れと同じく、「物多に」は地名「大宅」全体に係るのでは

なく、単純に「大宅」の「大 オホ」に係るものと考え

ことができる。このように考えるならば、時代別国語大辞

典および日本国語大辞典が「大宅」の原義と考えている

「大きな建物」の義に根拠がなくなることになる。

肥前國風土記には、「大家郷 オホヤノサト」の例

23、白水郎等 就於此嶋 造宅居之 因曰大家郷

〔肥前國風土記松浦郡 三九八頁〕

があつて、『風土記』頭注には、

○多家、民戸の多い意の郷名

と注している。この場合には、白水郎の民戸をさしていて、

水田耕作をしている播磨國の「家」とは異なる性格の集団

のものであるが、「家」が民戸の集団を言うものであり、「大―小」ないし「大―少」の対比が考えられる。（現在の滋賀県に、大家族を意味する「おおやけ」と小家族を意味する「こやけ」の語があることも、参考になる。）

さらに、「少宅 ヲヤケ」の例もある。

24、少宅里 本名漢部里 土下中 所以號漢部者 漢人居之此村 故以爲名 所以後改曰少宅者 川原若狹祖父 娶少宅秦公之女 即號其家少宅 後若狹之孫智麻呂 任爲里長由此 庚寅年 爲少宅里

これらの場合、「オホヤケ」――「ヲヤケ」は、集団の大きさをいう語である。

ミヤケが御料地の義で用いられるようになったようにオホヤケが御料地の意義で用いられる時、「大」の義は、「大―少」の「大」の義に加えて、尊称の「大」の義が加わることになる。播磨国風土記揖保郡の条の「大家 オホヤケ」の場合の「オホ 大」は、「大宮」の「大」に同じく、全く尊称としての「大」の義である。

一・四 ヤケ・ミヤケ・オホヤケの語義

本稿で明らかになったことは、ヤケは、所領地・御料地

を指す語であり、そこに奉仕する共同体（氏族）を含むものである場合もある語である、ということである。風土記のヤケに建造物の義のものはなく、また、ヤケヒト・ヤカベの「ヤケ・ヤカ」が農業経営体を指すものであることを考えれば、このことは容易に首肯されるものである。また、ミヤケも、御料地を指す語であり、「官倉」や「里の役所」などの建造物の義は後にできたものである。「ヤケ」に尊称の「ミ」が付くのは、「処」に「御」が付いて「ミトコロ」となることに等しい。その御田の穀倉は役所の役割を果たすものともなった。

「オホヤケ」の「オホ」は、「ミ」よりもさらに敬意を含む。「オホ」は、「大王 オホキミ」の「オホ」に通じる、尊称ないし権威を表わす語である。従来の説のごとく、「大きな建造物」が「オホヤケ」の原義であるのではない。この「オホヤケ」は、中国語の「公私」の「公」にあたるものとして、その訓となった。

以上のように、ミヤケ・オホヤケは、農業経営の中で使われていた語で、水田耕作を主な経済基盤とする大和朝廷の直轄地を指す用語となり、官府・朝廷の意味をもち、さらにオホヤケは、国家・社会を指すことにもなっていた語であった。

オホヤケは、平安時代には、「天皇、皇后、中宮」などを指すもの、「公的なこと、政治に関すること」を指すもの、などに意義を広めていく。また、

25、左のおとゞも、公おほりわたし私ひきかへたるひきかへたる世のありさまに、ものうくおぼして、致仕の表たてまつり給を、…

〔源氏物語賢木 新日本古典文学大系19 源氏物語 一〕一九九三年。三八二頁

のように、「オホヤケワタクシ」と並置して、対概念をあはわす形で使われてもいる。

このように「オホヤケワタクシ」と並置されるオホヤケとワタクシは、大宝令の「公田」「私田」の制定の頃までに成立していた概念である。そのオホヤケが、農業経営の中で使われていた語であり、しかも、大宝令の用い方では、「公田」「私田」と、「田」という農業に直結するものについての対比である時、ワタクシもやはり、農業に関連する言葉からできた語であることが想定される。ワタクシは、どのようにしてできあがった語であつたのだろうか。

二、「ワタクシ 私」の形成

〈はじめに〉に述べたように、萬葉集卷第七・1275の歌の歌われた白鳳期の時点ですでに、「オホヤケ（公）」

——「ワタクシ（私）」という語が存在し、対立する概念でとらえられていた。

大和朝廷が政治を担っていた時代に、豪族の私有地―田莊（タドコロ）を耕作する部民は部曲・曲部・民部（カキ・カキベ）で、朝廷の直轄地―屯倉（ミヤケ）を耕作する田部（タベ）や、天皇や皇后の名を冠した名代（ナシロ）、天皇・皇后・皇子に子のない時にその名を付けた子代（コシロ）、伴造の統率のもと専門の職務・技芸をもつて朝廷に仕える品部（トモベ）などととも、氏姓制度の基盤をなしていた。

大和朝廷は、しだいに朝廷の直轄地を増やした。その管理は、国造を介してするものから、直接管理するものへ、また、中央から役人を派遣するものへと変化し、大化の改新の公地公民制に近づくものとなる。

この大化の改新を契機として、公田（オホヤケダ）・私田（ワタクシダ）の語が導入されたと考える。

二・一 ワタクシの語構成

では、ワタクシは、どのようにして成立した語であつたのであろうか。

オホヤケの方は、記紀や風土記に、ヤケやミヤケという語があることから、また、「屯倉」「御宅」「大宅」

などの記述を「ミヤケ」「オホヤケ」と訓むことがわかっているところから、その原義を確かめることができる。

ところがワタクシは、萬葉集に「私田」のような記述があるのみで、一音一字表記がなく、「屯倉」や「大宅」のような、原義のわかる表記も見つかっていない。平安時代の和文の「おほやけわたくし」という対比などをもとに、「私」を「ワタクシ」と訓むことができる、と言えるだけである。また、オホヤケとミヤケのように、意義の近い語も見あたらない。ただし、「ミヤケ」「オホヤケ」が水田耕作経済国家の成立とともにできあがっていった語であったことより、「ワタクシ」の方も、相似た背景から形成された語ではなかったか、と想定する。

その語構成は、

ワタクシ ワタク・シ ワタ・クシ ワタ・ク・シ

ワ・タクシ ワ・タク・シ ワ・タ・クシ ワ・タ・ク・シ

の八とおりを考えることができる。この分節のうち、概念を考慮することのできるものは、

ワ ∷ 「倭」「輪・環」「我」

タ ∷ 「田」

ワタ ∷ 「綿」「腸」「海」「渡」

クシ ∷ 「奇」「櫛」「酒」「串」

タク ∷ 「長ク」「焚ク・炊ク」

などである。「タクシ 託・托十ス」は、中世頃から使われている語であるので、これは省く。また、「タク」を語ととらえると、後の「シ」が不明になる。よって、考え得る語構成は、ワ・タ・クシないしワタ・クシのみとなる。

二・二 ワ・タ

まず、ワ・タの語構成について検討する。ワは「倭」「輪・環」「我」が考えられる。このうち、「倭」は、「倭国」を指すことになるから、むしろ「公 オホヤケ」を指すものとなるであろうから、これは除外される。

「タ」は「田」が候補として考えられる。

「ワ+ダ（格助詞）+クシ」も考えられそうに見える。

この場合、「ダ」は所有を意味する格助詞と言うことになる。が、格助詞「ダ」をもつ語の「ケダモノ」「クダモノ」（訓例は平安時代）の「ダ」が「モノ」を限定する場合に用いられていることを考えると、今の例とは「ダ」の用法が異なる。したがって、これは考えない。

「輪・環+田」「我+田」のうち、考えられるのは「我+田」である。一人称代名詞の「ワ」は、今ひとつの一人称代名詞「ア」に較べて複数的であり、公的である。しかし、萬葉集などでは、ほとんど区別なく「ア」「ワ」を用いている。そこで、これをワタの語構成の第一の候補とする。

二・三 ワタ

ワタの語構成について検討する。ワタは「綿」「腸」「海」「渡」が考えられる。

「綿」は絹綿であり、「腸」は臓腑であつて、「綿」「腸」は長いモノが小さい場所にかたまつて収納されているさまを語義の核にもつ語である。

「海」「渡」は「海人部」という義をもつことになる。海人は海に生きる人々で、土地に執着しない。班田を与えられても、土地を人に譲つて、自らは漁をしていた人々である。

さらに、ワタの可能性を考える。

ヤマトヒメノミコトが神の宮を初めに造つた多気の地に「垣内 カキウチ」という地名が残っている。領有地(民)の義であろう。

萬葉集卷第十八・4077の歌

わが背子が 布流伎可吉都能 (古き垣内の) 桜花
いまだふふめり 一目見に来ね

(萬葉十八・4077 答嶺目發思兼詠云遷任舊宅西北隅櫻樹 大伴家

持)

には「カキツ」の例がある。この場合は、「わが背子が古き垣内」であるから、「垣内」は「屋敷地」の義である。

また、萬葉集卷第十三・3223の歌

：甘南備乃 清三田屋乃 垣津田乃 池乃堤之 百不足 五十槻枝丹：

(萬葉十三・3223 雜歌)

に、「垣津田 カキツタ」の用例がある。時代別国語大辞典上代編「かきつた」の項の【考】に、

屋敷内の田とする説や、ツを連体格助詞とみて垣のほとりの田とする説があるが明らかでない。御田屋ミタヤは、神領の田の耕作のために田地に設けた番小屋であり、現在、方言で田地管理人をよぶこともあるらしい。このような田屋によつて支配されている田を垣内田カキツタとよんだものか。「日神尊以天垣田カキタ、爲御田」(神代紀上)の垣田も、同様の意の語か。↓かきつ

とある。ここに「ツ」を連体格助詞とみる説が挙げられている。「ツ」は、「庭つ鳥」「沖つ藻」「中つ枝」や「みをつくし(水脈つ串)」などの用例に明らかのように、「く」に有る・居る」をあらわす語(拙著「日本語のなりたち」二六八頁)である。よつて、「カキツタ」とは、「垣の中の田」の意となる。したがつて、「屋敷内の田」と同じ義になる。つまり、「垣内田」ととらえても「垣つ田」ととらえても、実質は同じものを指すということになる。

ところで、時代別国語大辞典「かきつた」の項の【考】

に、神代紀第七段一書第二の「垣田」の例が掲げられていた。これも「カキツタ」と訓むものであると考える。であるならば、「カキツタ」は「垣内田」ではなく「垣つ田」で、「カキツタ」の「ツ」は連体格助詞である。

そうして、萬葉集卷第十三・3223の歌の訳は、「：甘南備の清らかな御田家の家田（垣つ田）の、池の堤の斎櫓の枝に：」となる。

「カキツ 垣内」も「カキツタ 垣つ田」もカキ（垣）に囲われている。

さて、大化改新以前の豪族たちの領民（私有民）は「カキ」「カキベ」と呼ばれていたが、それは、領有地の周囲には「垣 カキ」がめぐらされていたことによるであろう。^⑩
「カキ」「カキベ」の文字は、「民部」「部曲」である。この「部曲」は、中国の用語で、「軍隊の編成単位」「私兵」「賤民」を指す。

「曲」の字はまた、「私」と通ずる語

此不以私曲（ワタクシ）之故留耕績之時者也。

（仁徳天皇即位前紀『日本書紀 上』三八九頁）

でもあり、「ワダ」と訓んで湾曲した所を指す語

曲浦（ワダノウラ）

（神武天皇即位前紀『日本書紀 上』一九一頁）
でもある。「大和太 オホワダ」（萬葉一・31）、「ワダカマ

ル」「ワダマル」などに見られるように、「曲」の字の「まがる」義は、「ワダ」と把えられていた。（これは、右に挙げた「綿」「腸」の核の義にも通ずる）

中国から輸入した「部曲」にあたる語は「カキ」「カキベ」であったが、「曲」の字の「まがる」や「私」の義に相当する和語は、「ワダ」であったということである。

この「ワダ」が「ワタクシ」形成に関与したのではないだろうか。これを「ワタ」の候補のひとつとする。

この場合、「ワダクシ」と「ダ」が濁音である可能性のある言葉である。濁音が清音に変化する例は、「ワタ」や「カツラ」に求めることができる。すなわち、「腸 ワタ」は「曲 ワダ」がもとになってできた語であると考えられている。また、「カツラ」が「カツラ」に変化する例もある。であれば、同じように、「ワダクシ」が「ワタクシ」に音変化することは十分考えられることである。

以上、ワタの候補として、「綿」「腸」「海」「渡」および「曲ハワダ」を考える。

二・四 クシイナダヒメとクシダガワ

次に、クシについて考える。二・一に述べたように、クシの概念は「奇」「櫛」「酒」「串」が考えられる。ただ、この場合、形容詞が語末にくることはないから、「奇 ク

シ」は除外される。したがって、クシの候補は、「櫛」「酒」「串」となる。

神代紀第五段一書第十一に、月夜見尊が撃ち殺したウケモチノカミの身体に牛馬や穀物が生り、アマテラスオホミカミは「是の物は、顯見しき蒼生の、食ひて活くべきものなり」と言つて、粟稗麥豆を陸田種子（はたけつもの）、稻を水田種子（たなつもの）とし、天邑君が、その稻種を始めて天狭田（あまのきなど）及び長田（ながた）に殖えた、という記述が見られる。これが、農業の始まりの神話である。

アマテラスオホミカミの弟、スサノヲノミコトは、タカマガハラから逐われて、イツモノクニの簸の川上に降り立つ。そこで、国神のむすめクシイナダヒメ（日本書紀では「奇稻田姫」という字をあてている）を八岐大蛇から救い、妻とする。そこに生まれた子（あるいは、六世の孫）が、オホアナムチノカミ川大國主神（後に大黒さまと混同されて、穀物神として信仰される）である。このクシイナダヒメは、その名の中に「稻田」をもっている。この当時までに、イツモの人々も農耕をするようになっていた、ということである。

クシイナダヒメの「クシ」は、日本書紀（奇稻田姫）では「奇」であり、古事記（櫛名田比賣 クシナダヒメ）では「櫛」の字をあてている。「櫛」字は、後に姫が湯津爪

櫛に形を変えることの聯想からする類音の字であつて、「クシ 奇」は「靈妙な」の義の美称であると考えられている。日本古典全書『古事記』（神田秀夫／太田善廣校註 朝日新聞社 一九六二年）は、クシナダヒメ（櫛名田比賣）の注（上二二八頁）に、

○神代紀に「奇稻田姫」とあり、仁多郡の稻田といふ地名による名であらうと言はれる。クシは美稱と解されるが、なほ「酒（クシ）の田」といふ理解もあつたかも知れない。古事記で、「櫛」字を用ゐてゐるのは、後のユツツマガシとの聯想によるのであらうが、「串（クシ）の田」といふうけとり方も無かつたとは言へぬ。

と述べる。古事記には、この後にユツツマガシ（湯津爪櫛）が出てくるが、またさらに、サカブネ（酒船）も出てくる。「櫛」字を用いているのが後のユツツマガシとの聯想によるのと同じく、「酒（クシ）の田」も後の「酒船」との聯想によるものであらう。類音を用いたものはかえつて、原の意から遠い。日本古典全書に、今ひとつ「串（クシ）の田」の解釈のあることに注目しておこう。この「クシ」は、ミラツクシ（落標川水脈ツ串）の「串」に同じ、「標」である。

さて、スサノヲノミコトが八岐大蛇の尾より得た草薙劍

は、後に、ヤマトヒメノミコトよりヤマトタケルノミコトに授けられる。八岐大蛇を征伐したスサノヲノミコトと、まつろわぬ人々を和したヤマトタケルノミコトとは、草薙剣によって関連付けられているのであるが、まつろわぬ人々を武によって和したヤマトタケルノミコトの神話化が、スサノヲノミコトの八岐大蛇征伐であろう。

そのヤマトタケルノミコトの伯母であるヤマトヒメノミコトが、アマテラスオホミカミを祀る土地を探して巡行した時、イツキノミヤを造ることになる多気において、川に櫛を落とした。このことから、その川をクシダガワ（櫛田川）と名付けた、という地名説話が『倭姫命世記』の中にある。ここにも「クシ」があらわれる点でも、スサノヲノミコトの物語とヤマトタケルノミコトの物語とは、相似形をなしているのであるが、こうして「クシ」という語が用いられていることに、大きな意味があるであろう。

ただし、他の諸々の地名説話同様に、地名説話には信憑性が薄い。地名説話に述べられた事柄は、かえって、その事柄が地名の由来とは異なることを証すると言つてよい。したがって、クシダガワの名づけも「櫛」とは全く異なるものであると考える。それではクシとは何か。

ヤマトヒメノミコトの御陵は伊勢市倭町（ヤマトマチ）に存在する。隣り合わせて、倭姫宮のある神田久志本町

（コウダクシモトチョウ）、伊勢神宮の神田（家田）のある楠部町（クスベチヨウ）がつづく。これらの町名がいつ付けられたものであるのかはわからないが、神田久志本（コウダクシモト）という町名には、神田とクシとがあらわれていることが注目される。

また、和歌山県南端に串本（クシモト）町という地名が存在し、六十kmほど離れた三重県熊野市に本本（キノモト）町という地名が存在する（これらの町が存在するのは、イザナギノミコトの花の窟神社、神武天皇の東征伝説、徐福伝説のある地域である）。本本の名は紀伊山地の材木集積所に由来すると考えられ、同様に、串本も「クシ」の在る土地、「クシ」のふもとの土地、というような意義をもった語であつたと考えられる。右の神田久志本町のクシモトも同じであろう。

現在、櫛田川流域には、櫛田川の豊かな流れに沿つて農地が開けている。それは、三十年ほど前まで大和盆地に開けていたのと同じ、整然と区画された広々とした農地である。ヤマトヒメノミコトは、この川の近くにタケノミヤを造営したのであるから、この川の流域に造つた農地は、ヤマトヒメノミコトにとつて、最も重要な占有の農地であつた。このことと、クシイナダやクシダの「クシ」とを重ね合わせて考えてみる時、「クシ」は、「専有・占有」の義をもつ語であつたのではないか、ということが考えられる。すな

わち、「クシ」は「串」がその原義で、「占有地」の標（しるし）を立てた田を、「クシダ」「クシイナダ」と呼んだのではなくったか。

クシイナダヒメもヤマトヒメも、神の宮に仕える人・およびそのむすめであつた（日本書紀では、クシイナダヒメの両親は、スサノヲノミコトによって、大己貴神の宮の首として、稲田の宮主の神と名付けられた。古事記では、クシナダヒメの父の足名椎の神が、スサノヲノミコトの宮の首として、稲田の宮主須賀の八耳の神と名付けられた。）。

祭政一致の世においては、王の諸領地は神田に等しい。しかし、「祭ることは政ること」であるその時に、「神田」という概念は起こり得ない。「神田」の概念の起こるのは、祭政分離した後のこと、日本の歴史に照らして言えば、律令国家ができあがり、公地公民・私地私民の概念の導入されてからのことである。それ以前には、神の名において開墾された農地は、「クシダ」と呼ばれていたのではなかったか、と考える。

祭政分離した後にクシダは神田と呼ばれるようになった。神田久志本町という地名は、神田の標のふもとの地の謂いであろう。

以上のように、「占有地」の義の「クシ 串」を考える。「クシ 櫛」「クシ 酒」と合わせ、これをクシの候補の

ひとつとする。

二・五 ワタクシ

二・二「ワ・タ 我田」、二・三「ワタ 綿」「ワタ 腸」「ワタ 海」「ワタ 渡」「ワタ 曲」と二・四の「クシ 櫛」「クシ 酒」「クシ 串」の候補から考えられるワタクシの語構成は、

我田櫛、綿櫛、腸櫛、海櫛、渡櫛、曲櫛、

我田酒、綿酒、腸酒、海酒、渡酒、曲酒、

我田串、綿串、腸串、海串、渡串、曲串

である。クシが「櫛」や「酒」であると、それぞれの候補は、「櫛」「酒」の一態をあらわすものとなる。ここから「私」に至る意義は考え難い。よって、クシの候補は「串」に絞られる。また、「綿」は絹綿であり、「腸」は臓腑であつて、その占有地というのも考え難い。

次に、「海串」「渡串」の場合、これは海人部の占有地ということになる。海人は海に生きる人々で、土地に執着しない。班田を与えられても、土地を人に譲つて、自らは漁をしていた人々である。その人々の占有地ということであれば、港を指すものとなるであろう。しかし「海串」「渡串」が港とむすびつく用法はなく、「ワタシ 渡し」という語が存在するから、「海串」「渡串」の語構成はないであ

ろう。したがって、ワタクシの候補は、「我田串」「曲串」にしぼられる。

「ワ・タ・クシ 我田串」「ワタ・クシ 曲串」いずれの場合も、私有地を指す言葉である。このふたつの語構成のどちらがワタクシの形成に関与したのか。

二・四で「神田久志本町」に触れた。「神田」と「我田」の対比から、「ワ・タ・クシ 我田串」の可能性を考えてみる。が、「神田久志本町」は「神田」と「クシモト」とが結びついたものであって、「神田クシ」で概念を形成するものではないので、これをもとに「我田串」を考えるのは難しいであろう。

次に、「ワタ・クシ 曲串」については、二・三に掲げた此不以私曲（ワタクシ）之故留耕續之時者也。

（仁徳天皇即位前紀『日本書紀』上「三八九頁

の例から「曲串」の可能性を考えることができる。

以上のことから、「曲串」をワタクシの原義と考える。

公田・私田の概念の導入される以前、朝廷の管轄する田地は「クシダ」であり、私に開墾した田地は「曲串 ワタクシ」と呼ばれたであろう。公田・私田の概念が導入された時、「公」には「オホヤケ」の訓みがあてられた。一方の「私」にあてられたのが「ワタクシ」であった。

ミヤケ・オホヤケは、農業経営の中で使われていた語で、農業を主な経済基盤とする大和朝廷の直轄地を指す用語となり、官府・朝廷の意味をもち、さらにオホヤケは、国家・社会を指すことにもなっていた語であった。「ワタクシ」も、それに対する意味合いで用いられるようになっていく。

二・六 ワタクシの形成

公地公民・私地私民という言葉が中国より採り入れられ、公私の別が明確になったのは、律令国家が成立して、豪族と天皇との力関係が定まってからのことである。農耕をその成立基盤とする国家においては、公私の別とは、「田」の区別のことであった。

「公田」は、旧来の豪族の用語でもあった「屯倉」をそのままに用いたが、それは朝廷の、公の領地の意になった。「私田」はどうか。「ワタクシ 曲串」すなわち「私の占有地」であろう。これが一語化して、「ワタクシ 私」となった。

（二〇〇六年九月二十五日）

底本として、岩波日本古典文学大系『風土記』（一九五八

年・岩波日本古典文學大系『古事記 祝詞』（一九五八年）・岩波日本古典文學大系『日本書紀 上』（一九六七年）・岩波日本古典文學大系『日本書紀 下』（一九六五年）・塙書房『萬葉集』（一九六三年）を用いる。

注

(1) 萬葉集卷第七・1294の歌の後に、「右廿三首柿本朝臣人麻呂之歌集出」とある。

(2) 【考】「公田」に対する称であった「私田」は、カクシダ・キサキダと訓めるか。

(3) もと、禾と、かこむ意の口とにより、かこつて自分のものとしたいね、ひいて「わたくし」「ひそかに」の意を表わす。

〔角川新字源〕5589【私】の項、七二七頁。角川書店一九八六年

(4) 萬葉集中には、題詞に、五・813「…公私往来…」、八・1557「故郷豊浦寺之尼私房宴歌三首」、五・880「敢布私懷歌三首」、左注に、十五・3590「右一首覽遠私家陳思」、二十・4385「右一首葛飭郡私部石嶋」などがある。二十・4385の「私部石嶋」を「きさきさべのいそしま」と訓むように、「私」を「キサキ」と訓むことのできる場合はあるが、今の場合は、本文中に述べる理由から、「私田」を「キサキダ」と訓む説はあたらない。

また、「公」は、右の、五・813「…公私往来…」のほか、十六・3804「公事有限定期無日…」、五・811「…故附公使聊以進御耳…」などがあり、さらに「公」を「キ

ミ」と訓むことのできる例が多数（二〇八例）ある。

(5) ミヤケは、時代別国語大辞典（三省堂 一九六七年）に、みやけ【屯倉・官家】（名）①朝廷の領地の御田ミタからとれる穀類を貯蔵する御倉。また、その耕地・農民をもさす。

ミは接頭語、ヤケは宅・家。「是歳、興屯倉みやけ〔弥夜氣みやけ〕于来目邑」（垂仁紀二七年）「依網屯倉みやけ阿彌古捕異鳥」（仁徳紀三三年）②朝鮮半島諸国の官府・屯倉ミヤケ。ウチツミヤケ（内官家）とも。「願天皇獲勝善之徳、天皇所用弥移居みやけ国俱蒙福祐」（欽明紀六年）「百濟国者、為日本国之官家みやけ、所由来遠久矣」（雄略紀二〇年）③朝廷「官みやけノ船名枯野者、伊豆国所貢之船也」（応神紀三一年）【考】②は対鮮関係のミヤケで、日本書紀では、一般に「官家」と書いて、国内の「屯倉」と書き分けている。

とあり、日本国語大辞典（初版）には、

みやけ【屯倉・屯家・官家・三宅】（み）は接頭語。「やけ」

は「やか（家・宅）」の変化した語 ①律令制以前、天皇の直轄地である御田（みた）におかれ、収穫した穀物を納めた倉および官倉。また、朝廷直轄領をいう。書紀―垂仁二七年。②（官家）①になぞらえ、日本に対する貢納国の意で）大和朝廷が四世紀末頃から六世紀後半まで南朝鮮に領有した直轄地。うちつみやけ。書紀―欽明六年「彌移居」。書紀―継体六年（前日本訓）「官家（ミヤケ）」③大化以後、正税として稲などを収納する公の倉庫、およびそれを管理する役所。出雲風土記「正倉」。④朝廷をいう。水戸本内日本紀秘記―応神「官船（ミヤケのふね）」。

とある。（以下、日本国語大辞典の用例は、そこに掲げられ

た用例の一部である。おおむね作品名にとどめ、内容記述を省略するものもある。―筆者)

(6) 日本書紀の「屯倉・官家」について、岩波日本古典文学大系『日本書紀 下』補注18-1-13(五五〇頁)に、詳細な説明がなされている。

ミヤケの語義は御宅、すなわち屋舎・倉庫に対する敬称であるから、たとえば郡家や正倉、あるいは私的な荘園の施設なども、一般にミヤケと呼ばれることがあった。しかし書紀に屯倉とあるものは、国家制度としてのミヤケで、大化前代における朝廷直轄の農業経営地あるいは直轄領ともいべきものである。

……(中略)……

…ふつうはこのような屯倉内の農民を田部と呼んだとしているが、そういう確かな実例はほとんどない。ミヤケという名称から、このような屯倉を、倉を中心とした出挙(すゐこ)などによる農民支配方式の発展したものとする見方もあるが、倉庫などの施設が最も目につくためにミヤケと呼ばれたにすぎないかもしれないから、屯倉の本質をとくに倉の機能に求めることには問題がある。

……(中略)……

以上各種の屯倉は、内部に農民を含まないものもあるから、その本質は農民支配の機構というよりは農業経営体という点にあり、また屯倉には天皇領や個々の皇族に充てられたものもあるが、一般的には皇室領ではなくて、朝廷直轄領とみるべきものである。そのうち初期の屯倉は主として中央の経済力を飛躍的に充実させ、後期のものは部(べ)の発展と相俟って、朝廷の基盤を地方に拡大し、国

造以下の地方勢力をより強く中央に従属させる役割を果たしたが、大化二年正月の改新の詔に至って、田荘(たどころ)とともに廃止を宣言された。…

(7)

オホヤケは、時代別国語大辞典に、おほやけ【官・公】(名)①宮殿などの大きな建築物(↓やけ)。この意味のオホヤケは地名にだけ残っている。「物多サハに於哀野談おほやけ過ぎ」(武列前紀)「大家おほやけ里旧名大宮里土中上、品太天皇巡行之時、営宮此村、故曰大宮、後至田中大夫為宰之時、改大宅おほやけ里」(播磨風土記揖保郡)「謚天智庚午年、依居大家、負大宅おほやけ臣姓」(姓氏錄)②朝廷。官庁。「官おほやけ二ツカサ無廃事」(崇神紀一二年)「国家おほやけ情深、君臣義切」(雄略紀七年)【考】①が原義で、これに相当する官庁や官の倉庫には設備・物品が多いところから、①の第一例に見える枕詞をうけることにもなる(↓ものさばに)。遊仙窟陽明本に「王事おほやけコト」「天公おほやけコト」(お天道さまの意)「公使おほやけツカヒ」などの例がみえる。

とある。

(8)

日本国語大辞典は、オホヤケを、おおやけおほ：【公・大宅】(名)「やけ」は「家・宅」。「おほやけ」の原義は、大きな家 ①大きな家。屯倉(みやけ)などの大きな建築物。②朝廷。政府。官庁。幕府。

書紀天武即位前(北野本訓)「司」。竹取「おほやけ」③天皇。皇后。中宮。竹取。宇津保。源氏。栄花。④国家社会。書紀大化二年八月(北野本訓)「国家」。源氏。⑤公的なこと。政治に関すること。枕。徒然草。⑥表むき表ざた。表だったこと。⑦(形動)公平であること。私情

のないこと。⑧（形動）金持ち。財産家。資産家。

《補注》「日本書紀」「和名抄」「播磨風土記」などに地名としてのものがある。「おほやけ」が大きな家をさすところから、宮殿、皇居、あるいは朝廷、政府をさすようになり、それから他の意味にも転じたものと考えられる。④以下は、「わたくし」（私）に対するものとして用いられる。

《方言》②大家族の家。滋賀県

とする。日本国語大辞典が、現代の方言の「大家族の家」の義を記していることに注意したい。また、日本国語大辞典には、さらに、

おおやけごろおほやけ…【公心】（名）公平な心。私のな心。忠心。書紀天武七年一〇月（北野本訓）「公平（オホヤケココロ）」

おおやけでらおほやけ…【官寺】（名）朝廷が管理する寺。かんじ。続日本紀「官寺（おほやけでら）」。

おおやけものおほやけ…【公物・官物】①天皇、朝廷の所有物。公有物。官有物。↓私物（わたくしもの）。書紀持統八年五月（北野本訓）「官物（オホヤケモノ）」。

などの項目も存する。

なお、日本国語大辞典には、

やけ【宅】（名）「やか（宅）」に同じ。続日本紀。名語記《方言》「大やけ」「小やけ」家族の人数 滋賀県愛知郡

やか【宅】（名）（屋処（やか）の意）いえ。家宅。やけ。

源氏東屋「やかの辰巳の隅のくづれ、いと、あやふし」と言う。ここにも、現代の方言の「大やけ」「小やけ」の記述のあることに注意したい。

（9）新潮日本古典集成『萬葉集 四（二四頁）では、

…御田屋をとりまく田んぼの池…

と、「ノ・カキツ」の部分を「…をとりまく」と訳している。大和は 国の眞穂ろば 豊なづく 青垣 山籠れる 大和しうるはし

〔古事記30歌謡〕

ここに「青垣」というのは、青々とした山々が、大和盆地を囲んでいることを言う。

垣には、葦垣（アシガキ）、竹垣（タカガキ）、柴垣（シバガキ、フシガキ）などがある。籬（マガキ）は門口の垣。玉垣（タマガキ）・斎垣（イガキ）・瑞垣（ミツガキ）は、ひろきや神社の周囲にめぐらせた囲いを言う。植物や石で空間を限るものがカキであった。

部曲・曲部・民部をカキ・カキベというのも、それが限られた一区画のことであり、また、領民が所領の区画の垣の中に囲われ保護されていたことに由来する。